初の国立自然史博物館を沖縄に：琉球大学・西田睦学長インタビュー

National History Museum to Okinawa: Interview with the President Mutsumi Nishida, the University of the Ryukyus

宮本　聖二
MIYAMOTO Seiji
立教大学

「日本学術会議」では、「自然史科学研究」を充実させるために「国立自然史博物館」の設立が急務であると提言しています。

特に、デジタルアーカイブ学会第7回研究大会の会場となった琉球大学学長の西田睦さんが、その日本初の「国立自然史博物館」を沖縄に設立しようと中心メンバーの一人として活動をしています。

欧米の主要国には、古くから自然史科学の拠点としての「国立自然史博物館（英：The Natural History Museum、米：The National Museum of Natural History）」がありますが、日本にはまだありません。

そうした国々では、自然史博物館は資料の収集、保管、展示の重要な場であり、研究、教育の拠点となっています。

生物多様性を背景に、なぜ自然史博物館が沖縄に作られるべきなのかを西田学長に伺いました。

（2023年3月9日、琉球大学学長室にて。聞き手：デジタルアーカイブ学会理事・宮本聖二、評議員・真喜屋力）

西田睦 琉球大学学長 東京大学名誉教授

1972　京都大学 農学部 水産学科　卒業
1977　京都大学 大学院農学研究科　博士課程単位取得退学
1980　琉球大学 理学部 海洋学科　助手
1991　カリフォルニア大学 バークレー校 分子細胞生物学科 客員研究員
1992　琉球大学 理学部 海洋学科　講師
1996　福井県立大学 生物資源学部　教授
1999　東京大学 海洋研究所　教授
2007　東京大学 海洋研究所　所長
2013　琉球大学　理事・副学長
2019　琉球大学 第17代学長

なぜ今「国立自然史博物館」なのか

（西田）名前に入っているタームはそれぞれが重要だと思います。「自然史」と「博物館」、そして「国立」です。

まず、「自然史」。これはまさに自然の歴史と考えていただいていいです。

さまざまな地球環境問題を前に、我々は今の「自然」を理解しなければなりませんが、「過去」があって現在に至っているわけで、そういう過去をあるいは起源をしっかり押さえないと「今」を十分理解できないということです。

さらに将来を考えようとすると、ますますそこが重要になってくる。歴史的に捉えないといけない。そういう自然史を研究する学問、自然史科学と呼んでいますけれども、これをもっともっと発展させていく必要がある。それを担う組織として、自然史博物館を考えます。

欧米の自然史科学の発展を見てみますと、長い歴史

英・自然史博物館（ロンドン・HPより）

を持つ自然史博物館、それも国立のしっかりしたものがヨーロッパ、アメリカにはあるんですね。

いわゆる先進国の都市であるロンドン、パリ、ワシントン D.C. あるいはニューヨークなどで、研究をし、その研究のもとになる標本資料をしっかり収集して整理・管理し、その成果を展示し、あるいは教育に向けて普及していくということをやっています。

そこには、研究者も大勢いるんですね。日本で言えば教授、准教授に当たる人たちもいて、しっかり研究もしているのです。

つまりそこでは、いろいろなサポートがあって、手分けをして標本を収集・整理・管理が行われ、そして研究をし、普及していくという活動を多くの人が担っているんです。

日本を振り返った時に、そこが弱いのです。

我々が考えている国立自然史博物館に近いものはもちろんゼロではなくて、国立科学博物館があります。

ある程度この機能は担っているとは言えるのですが、欧米先進国と比べると、標本の量にしても、研究者の数にしても、サポートにしてもたいへん少ないです。

それを強化していかないといけないなというのが我々の考えているところです。

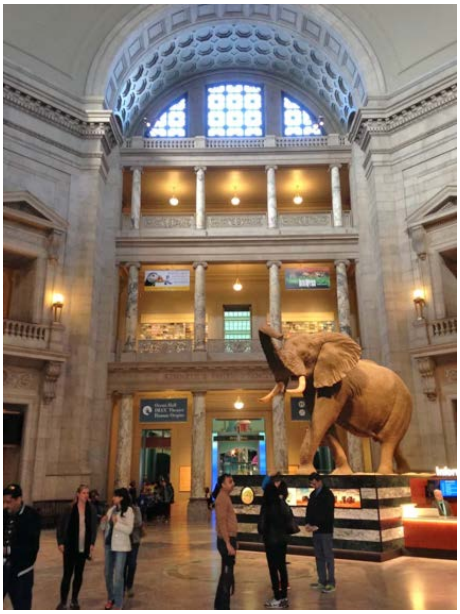
次に「博物館」ですが、この言葉、人によってはちょっと古臭い感じも受けるかなということがあるかもしれません。けれども歴史的に見るとどうでしょうか。

アレキサンダー大王の頃からしっかり博物館を充実させていましたね。図書館、美術館まで含んだ大きなコンセプトでやっていたようです。

確かに学問も含めて文化の殿堂として作られていたと思うのですけれども、そういうもののいいところを引き継ぐのだというふうに考えたいです。

欧米でのその自然史博物館の何が良かったかというと、18 世紀から 20 世紀に自然科学といろんなテクノロジーが急速に発展しますけれども、その大もとはそういう自然史博物館で収集し持っていた標本等とその研究が土台になっていたということです。

日本の場合、明治時代に科学と技術を欧米から導入



米・自然史博物館（ワシントン・HPより）

したときに、その基礎の部分をすっ飛ばして、応用の部分を中心に吸収してきた。大急ぎで近代国家を立ち上げないといけなかったので仕方なかったとも思いますけれど、その弱かったところを今しっかりと再構築する必要があると考えています。

それで最後に「国立」というタームです。お話ししたように、日本という国としてその部分をしっかり担わないといけないという意味を込めて、やっぱり国立でやるべきだというふうに思っています。

日本も発展した先進国になっているわけで、人類の知恵の重要な部分をしっかりと担っていく必要があって、それは応用分野だけではなくて基本のところもしっかりやるという必要がある。そういうことを担うのが国立自然史博物館です。

どこに設置すべきなのか

（西田） 国立自然史博物館のコンセプトは、日本学術会議でその必要性が長年議論されてきたのです。

議論がさらに高まり、「提言」として 6 年ばかり前にまとまったんですけれども、見えてきたことは「どこに設置するのがいいか」ということです。その議論が深まった一つは、東日本大震災です。

震災では、東北地域の博物館が相当な被害を受けました。各地から、数多くの研究者が標本のレスキューに行きました。大きな災害で標本などが大きなダメージを受けるということを、まざまざと経験したんですね。

東京には国立科学博物館があるけれども、もし関東に大きな災害が来たときにどうなるのだろう、バックアップ機能が必要だなという議論になります。そうすると、国立自然史博物館を創設するという時に、やっぱり東京からは離れたところの方がいいんじゃない

か、北海道だとか、あるいは沖縄だとか、いういろいろ議論をしました。そういう議論の結果、沖縄がいいだろうということになったんですね。

沖縄～生物多様性とアジアとの関係で～

（西田）生物多様性は、そもそも日本は結構高く、中でも沖縄はたいへん高い地域です。

それはなぜかというと、東南アジアが地球上で最も生物多様性の高いところなんですが、沖縄はその範囲の北限なんですよ。それは陸上もそうですし、海中もそうです。

沖縄本島北部に広がる深い亜熱帯の森（設立準備委員会HPより）

ですから、沖縄に国立自然史博物館を創ると、生物多様性のまっただ中にそれができることになる。先進国で国立自然史博物館がある場所がどうかというと、ロンドンやパリ、ニューヨークの話をしましたが、こういうところは決して生物多様性が高いところではない。そのような現状の中で、最初から生物多様性のまっただ中に日本の国立自然史博物館ができることになると、その意義は非常に大きいと考えられます。

現在、生物多様性のもっとも高い東南アジア・東アジアでは、急ピッチで開発が進んでいます。そこに標本を収集、管理、保管して研究をし普及をする拠点、開発のあり方を考える拠点があるかというと、まだまだです。

そうすると沖縄に日本の国立自然史博物館を創ると、アジアにおける拠点としてモデルの役割ができるということですね。

アジアの若い研究者の卵たちと一緒にやる。

日本の自然史博物館に来て一緒に研究して、その成果、知識・知恵をアジア全体で共有してもらうというふうにできる。そういう役割を果たせればいいなと思っています。これは日本全体の国際的役割ということを考えても大事なことになると思います。

では沖縄にとっての意義は

（西田）今度は、沖縄側に視点を移します。

沖縄では、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの直前に、入域観光客数が 1,000 万人を超えたのですね。まだまだ伸びていくところだったんです。ただ、滞在日数が必ずしも長くなく、観光コンテンツの質の向上が課題でした。

コロナ禍が落ち着くと、国内外の多くの人達が再び沖縄の自然や文化を求めて来られると思いますが、自然史博物館があれば、自然の現場を訪れる前や後にそこでしっかりと「予習」や「復習」ができる。質の高い旅行を実現する上で、そういう博物館の役割は極めて大きいです。

また、自然史博物館は、教育の面からも非常に重要です。先端的な自然史科学に触れる機会がどうしても少なくなる島嶼域の子どもたちに、その機会が提供できるということはもとより、さらに幅広いメリットがあります。それは、修学旅行です。

沖縄には日本全国から毎年約 45 万人の中学生・高校生が修学旅行で来てくれます。彼ら彼女らが沖縄に来て自然や文化に直接触れて楽しく学ぶことが大事ですが、同時に掘り下げて学ぶ場も大事です。その場を提供するという役割を自然史博物館は果たせます。

若い人たちが沖縄に来て、自然の多様性の学びをしてくれる。そして平和学習をしてくれる。そのいずれにとっても沖縄はたいへんいいところですので、そういう教育的機能も大きく果たせるということがあります。

彼ら彼女らが 10 年後ぐらいに、今度は家族を連れて来てくれることを期待したいですね。これはひいては沖縄地域の観光産業を支えることになりますので、地域にとってもありがたいことです。

設立準備委員会によって周知と支援の活動が進められている

自然史博物館をいま創るなら

（西田）では、いま国立自然史博物館を創るなら、ど

んな博物館にしていったらいいのか。

先進国の国立の博物館はいずれも趣のある伝統的な古いタイプの立派な建物で、だいたい 19 世紀から 20 世紀の初めぐらいの間に創られたものです。21 世紀に入ってもう 20 年以上となるこの時代に創るとなったら、ああいうものではないだろうと思います。

一つは、標本等を集めて管理し、研究するということは基本なのだけれども、もう 19 世紀とは違うのです。今は標本等を外国から勝手に集めて持って帰ってくることはできません。

それぞれの国や地域の生物とその標本、それらの遺伝情報、それらを活用するための伝統的な知恵や知識、そしてそれらを活用する権利等を無視して、それらを国外に持ち出したり、かってに利用したりすることはやめようという国際的取り決めができています。共同して丁寧に一緒にやりながらということが必要です。

それから、もう一つは、情報を最大限公表し世界で共有することです。インターネットが高度に発展したという条件を積極的に生かし、世界の博物館、研究機関、教育機関とオンラインでつながった形で活動するということも、もう 19 世紀や 20 世紀とは全く違います。最初からこの条件を組み込んで、ビッグデータ活用時代のデジタル自然史科学を確立し、発展させていきたいなと思っています。そこを担うような博物館でもありたいなということですね。

課題は、広く知ってもらうこと

（真喜屋）実現に向けてということになりますと、まだまだ知らない人もいます、機運が高まっていくために必要なことは何でしょうか。

（西田）自然史科学とその周辺の分野の研究者の集まり、学会だとか、学会連合ではしばしば話がなされており、幹部の皆さんには広がっています。それを踏まえて、研究者が中心に、国立沖縄自然史博物館設立準備委員会という一般社団法人が設立されています。これを軸に、沖縄や東京で一般公開のシンポジウムや展示会などを開催したり、『ナチュラル ヒストリー ミュージアム』という機関誌を年 2 回、冊子版と電子版で出して、情報を全国に広げる活動がされています。

沖縄県も活動を強めてきており、最近、（2023 年）2 月ですかね、県庁の中で各部が連携をして行動し、国立自然史博物館誘致の県民会議を作ろうということを知事が公表しました。県議会の議員さんにも関心を持ってくれる人が増えていますし、強い関心を示して下さる県内の自治体の首長さんも多いです。

また、沖縄経済同友会など地域の経済界も大いに関心を持ち、研究会を開いたり、前へ進めるための要望を県に出したりしています。

しかし、県内そして全国で機運が盛り上がるというところまでは、まだまだですね。やはり基本は、もっともっと多くの方に、こうした構想があること、そしてそれを実現することに賛同してもらうことだと思います。そのために、さらに強く各方面に働きかけることが必要だと思います。

あと、沖縄に創るとして、沖縄のどこに創るのか。そういう話も出てきます。

それで実はもう多くの地域・市町村から、創るなら是非うちにという風に、結構いろんな首長さんたちが言ってくれます。それぞれ、ああいいなという風に思えるんですけどもね。例えば、沖縄島の北部、いわゆる山原（やんばる）地域。そこには 3 つの村があるんですけれども、その 3 村で誘致推進協議会を作って 3 村長（宜野座、東、国頭）さんが来られたこともあります。あるいは石垣市長からは、ぜひ石垣島にと言われますし、宮古島市長はぜひ宮古島にと言われています。

沖縄本島北部に生息するヤンバルクイナ　（設立準備委員会のnoteより）

それぞれ重要です。

これは私が特に強く思っていることですが、全部捨てがたい。ということは、全部で担っていただく必要があるんじゃないか。沖縄県自身が島嶼県ですので、その島嶼全体で担うような形で創っていくということが大事じゃないかなと思います。しかも県境も超えて。

（宮本）琉球弧という考え方ですか。

（西田）そう、琉球弧は奄美、屋久島へと続いている。さらに北に伸ばすと九州から本州に行きますし、南に向かうと台湾、フィリピン、インドネシア、シンガポールと広がってきますね。そういう広がりの中で考えたいなと思っています。

21 世紀に創る意義と意味

（西田）標本庫などは、やっぱりしっかりものをどこかに創られないといけませんけれども、欧米の 19 世紀につくられたような立派な建物が物理的にドンとあるというよりも、一カ所にだけでなくてもいいかなと思いますね。

インターネット（技術）はまだまだ進みますし、すでに6Gの研究もされていますよね。高速でかつ大容量の情報が即時で展開できるようになる。そうしたら、大きなパネルに、ホログラフィーのようなダイナミックな立体映像の映写もできるでしょう。

そういうものも活用して、リアル感たっぷりに地域を繋いでいく。例えば奄美にいても沖縄あるいは西表というのがすぐ感じられる、という風にするのはとても面白いんじゃないかと考えます。それから、ネットワークは組織的にもしっかり組んでおけば、次は西表にも飛んで見てみたいなとなった時に、すぐにそこは旅行的にアレンジができるとかですね。そんなものも十分ありでしょうし、何かそういう新しいタイプのものにできたらなと思います。

それからさっき言ったように、生物多様性のまっただ中にあるわけですから、古典的な博物館的な部分で実物の標本を見て感じたことを、30分、あるいは1時間、1時間半で行けるところに現場がありますから、そこに行って「実際見てみよう」「さっき展示で見たものを試してみよう」ということができます。それが実現できるフィールドステーションまで含めた地域まるごと博物館という形を構想しています。

それから建物自体についてもいろいろ議論しています。今、本学の建築の若手教員なんかも検討のチームに入ってくれていますけれども、こういう高温・多湿のところにふさわしい新しいタイプの建物をどうしたらいいかとかですね、新しいセンスで議論しています。また、フレキシブルな建物っていいんじゃないかなという議論もしています。例えば3年ぐらいある特別展示をしてた場所は、3年経ったら次の形に変えて別の特別展示がなされる、とかですね。

リピーターはなんで行くのかというと、やっぱり全く同じだったら興味もちょっと薄れるが、また何か模様替えをしたとか、全く新たな展示があるらしいぞとか、そういうことがあると「じゃあ、また行ってみよう」ということになるみたいです。だから固定したものでなくて、何かどんどん変身していけるというのが重要なポイントで、それを実現してみたいですね。

今の美術館にしても色々な博物館、国立科学博物館もそうですけれど、常設展と特別展があるんですね。展示の一部を特別展とかで少しずつ変えて新鮮味を維持しています。でも、建物自体を大きく変えるというのは、なかなかないのではないでしょうか。

ふっと行ったら、あれっ？何か様子が変わってるぞ、という演出というのは面白いと思います。多くの人が何度も行ってみようと思うのではないでしょうか。

（宮本）そうですね。先生が今、琉球大学の学長をされていて、総合大学の中でいろいろ考えると、別に自然科学にとどまらず、さまざまなアイデアが出てきますね。

先の大戦でかろうじて残った龍柱の頭部のレプリカと西田氏
（琉球大学学長室にて）

（西田）夢をいっぱい語りましたけれども、現実に立ち戻ってみますと、実際にはどう予算を確保するのかとかいうのは、なかなか大変な事柄です。これを実現していくというのは、地道な努力を一歩一歩やることが基本だと思っています。そして県民、国民の皆さんがこういうものはぜひ必要だというふうになって、創立への熱意が高まってくることが実現の前提条件です。そこに向けて、新しいアイデアや夢を共有していく努力をもっとしないといけないと思っています。

デジタルアーカイブと自然史博物館

（西田）先ほど、ビッグデータを活用したデジタル自然史科学を発展させたいと言いましたけれども、そういう点はデジタルアーカイブ学会の関わっておられるところと極めて共通性があるところですね。さまざまな形の情報をしっかりキープし、研究し、広く共有できるようにし、それを発信するみたいなことは、おそらく共通ですよね。

私どもとしても（デジタルアーカイブ学会から）お知恵をいただきたいし、あるいはその部分でお力を貸していただいて、何か一緒に共同で発展できるような部分があればうれしいなと思います。今後とも、ぜひよろしくお願いします。

本日はありがとうございました。

この記事の著作権は著者に属します。この記事はCreative Commons 4.0に基づきライセンスされます(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/)。出典を表示することを主な条件とし、複製、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可されています。